

天と祆と祁連と

初唐頃からの書に祆字が散見し、これが波斯の拜火教即ち Zarathustra の開いた Mazdeism を稱するものであることは周知の事實である。自分は拜火教の支那に傳つた時代については、更に遡つて魏齊周の時代に見ゆる胡天神の崇拜といふものを以て之に該當せしむべきである事を以前から主張して居るのであつて、これに就いては近年刊行された陳垣氏の火祆教入中國考の見解に賛同する。單に胡天神といふだけでは必しも天を崇拜する Mazdeism と限る譯には行かないこと勿論であるが、隋書卷七禮儀志には、「後周欲招來西域、又有拜胡天制、皇帝親焉、其儀並夷俗、淫僻不可紀也」と見える。かく西域招來の爲に胡天を拜するといへば、其の胡天といふものは然く漠然たるものではなく、餘程性質を限定せられ、西域に行はれた天の崇拜と考へらること勿論である。一方隋書・北史・魏書・梁書・南史等の西域傳の記事を見ると、拜火教の本國なる波斯を始め、滑 (Ephtal) 高昌、焉耆などの西域諸國に於て、「俗事火神天神」とか、或は單に「俗事天神」とか記されて居る兩者を比較して考へると、こゝに所謂胡天を拜することとは Mazdeism を呼んだものであると見るのが最も適當の解釋だと考へる。隋書禮儀志には茲に引用した所の前に接して、北齊の後主が其の末年に、「祭非其鬼、至於躬自鼓舞以事胡天、鄴中遂多淫祀、茲風至今不絕」と記してあるが、其の祭儀の風及び記事の關聯の上からみても、前に引いた所と同一の胡天と解釋すべ